



移動事象は日英語話者にどう聞こえどう見えるのか ：移動表現の類型論における音象徴語の位置付け

秋田, 喜美

松本, 曜

小原, 京子

(Citation)

神戸言語学論叢, 6:1-19

(Issue Date)

2009-01

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81001517>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001517>



移動事象は日英語話者にどう聞こえどう見えるのか： 移動表現の類型論における音象徴語の位置付け

秋田喜美

松本 曜

小原京子

神戸大学文化科学研究科

神戸大学人文学研究科

慶応義塾大学理工学部

1. はじめに

本稿は、Talmy (1985, 1991)以来の空間移動表現の類型論に関する実験的調査の途中経過を報告するものである。具体的には、音象徴語（擬音・擬態語, *mimetics*, *sound-symbolic words*, *ideophones*）の豊富さによって、日本語話者による様態への言及が頻繁になるかを、英語話者との実験的比較により検証する。結論としては、日本語話者は音象徴語や他の様態表現を手助けに、量的には英語話者とほぼ同程度に、そして質的には英語話者よりも高い表現力を持って聴覚的・視覚的様態に言及するという実験結果を報告する。そのことにより、様態表現については、経路の言語化パターンを扱う Talmy の類型論からは独立した類型が必要である可能性が示唆されることになる。

まず、Talmy (1991, 2000)による移動事象の時間的枠付け（具体的には経路情報の言語化）のパターンに基づく言語類型論から始める。彼によると、世界の言語は枠付けパターンにより大きく二分される。ゲルマン諸語・スラブ諸語・フィン・ウゴル諸語等では、(1a)の英語の例のように、基本的に経路情報が節の非主要部（ここでは前置詞 *out (of)*）で表され、これらの言語は「衛星枠付け言語（*satellite-framed languages*）」（以降「S 言語」）と呼ばれる。一方、ロマンス諸語・セム諸語・バスク語・日本語・韓国語では、(1b)のスペイン語の例のように、基本的に経路情報が節主要部（ここでは主動詞 *salió*）で表され、これらの言語は「動詞枠付け言語（*verb-framed languages*）」（以降「V 言語」）と呼ばれる。

(1) a. 衛星枠付け言語：

The bottle floated *out of* the cave.

b. 動詞枠付け言語：

La botella *salió* de la cueva flotando.

the bottle went.out from the cave floating

非常に強い影響力を持ったこの類型論は、様々な言語学的・心理学的研究の動機付けとなった。中でも、“thinking for speaking”という言語使用レベルでの言語相対説を唱える Slobin らによる一連の研究 (Slobin 1996, 1997, 2000, 2004, 2005) はよく知られている。その中で彼は、言語類型による移動様態への言及頻度の差について「様態卓越性仮説 (the manner-saliency hypothesis)」という考え方を打ち出している。主に文字のない絵本 (いわゆる frog story ; 注 1 参照) の説明課題と小説の原書および翻訳の比較に基づき、彼は S 言語では様態が頻繁に言及される一方、V 言語では頻繁に省略されることを述べている。その説明として、彼は両言語類型における様態の言語化の違いを指摘する。即ち、S 言語では(1a)のように、様態が必須要素である主動詞 (ここでは *float*) により表されるため、必然的に様態表現が多くなる。一方、V 言語では(1b)のように、様態が付加詞 (ここでは *flotando*) により表されるため省略可能であり、結果として様態への言及が少なくなるというわけである。

ところが、近年になり、様態表現の頻度 (Slobin の言う「様態の卓越性」) に貢献する要素は「衛星枠付け言語であること」以外にも存在し、音象徴語のような形態素もその一つとなりうることを彼自身も認め始めている (Slobin 2004: 250-251)。本研究は、この可能性を日本語 (V 言語) と英語 (S 言語) の観察から追究することを目的とする。日本語は、音だけでなく非聴覚的 (主に視覚的) 様態を表す音象徴語システムが確立されている V 言語であり (Kita 1997, Hamano 1998, 田守・スコウラップ 1999, Kageyama 2007 等参照)、この仮説を検証するための格好の材料が提供されることが期待される。

2. 先行研究

Slobin の様態卓越性仮説を巡る日本語に関する先行研究としては、Ohara (2002) および Sugiyama (2005) における小説翻訳の調査が挙げられる。いずれの研究も、本来の Slobin の仮説に反し、英語から日本語への翻訳においては、音象徴語や複合動詞によって様態が頻繁に表現されると結論付けている。例えば、Ohara (2002: 135-136) は、*The Adventures of Sherlock Holmes* (A. C. Doyle 1892) および *Anne of Green Gables* (L. M. Montgomery 1908) の英語原本より抽出した 20 の移動事象が日本語においてどう訳されているかを観察した結果、殆どの例で様態情報が保存されていたことを報告している。(2)はそうした様態保存の一例である。この例では、下線で示したように、英語の音放出動詞 (sound-emission verb) *rattle* が「ごとごと」という重複形の擬音語を用いて翻訳されている。

- (2) a. We rattled through... gas-lit streets... (*Sherlock Holmes*)

b. ガス灯に照らされた夜の街路を、... 馬車はごとごとと走り続け...

(Ohara 2002: 135-136)

同様に、Sugiyama (2005)は、*The Hobbit* (J. R. R. Tolkien 1937) の第6章の原本より移動様態動詞が用いられた33の事象のうち23 (69.7%) が日本語においても様態表現を用いて訳されたことを報告している。この結果より彼女は、日本語話者はS言語話者には及ばないまでも、他のV言語の話者より様態表現を頻繁に用いると結論付けている¹。

これらの翻訳研究において不足している点としては、少なくとも以下の三点が挙げられよう。一点目は、統計的比較の欠如による議論の弱さである。例えば、Sugiyamaのデータにおける“69.7%”という数字が何を意味するのかは、客観的指標でもって考察される必要がある。二点目は、自発的発話データの欠如である。言葉を選ぶのに時間をかけられるという翻訳の特徴が、様態表現を頻繁にしたという反論を考慮すると、そうしたデータは不可欠である。最後に、これまでの移動の類型論一般における聴覚的移動様態に関する議論の欠如に注目したい。我々が経験・目撃する移動事象は、例えば足音やヘリコプターのプロペラ音のように、多くの場合音を伴って起こる。にもかかわらず、移動の音は、これまで様態の一種としては捉えられてこなかったようだ。実際、Slobin (2004: 255: n. 5)は移動様態を“‘[m]anner’ covers an ill-defined set of dimensions that modulate motion, including motor pattern, rate, rhythm, posture, affect, and evaluative factors”と定義し、聴覚的な様態がこれに含まれるか否かは明言していない。冒頭に述べたように、日本語は音基盤の語類である音象徴語を豊富に持っている。その点において、移動の音を様態卓越性仮説の文脈の中で考察することは重要であると考えられる。

3. 実験

翻訳研究では検証し切れなかった以上のような課題に取り組むために、本研究では短いビデオクリップを刺激とし、日英語話者に映像説明課題を課した。ビデオクリップを用いた *thinking for speaking* モデルの検証は、近年盛んに行われており (Naigles et al. 1998, Gennari et al. 2002, Oh 2003, Allen et al. 2007)、本調査はこうした研究の流れの中においても重要な位置を占めると言えよう。

3.1. 方法

本プロジェクトは、現時点において10名の日本語母語話者および7名のアメリカ英語母語話者からのデータを得ている。日本語については関西あるいは東海地方在住

の話者（女性 7 名、男性 3 名；22～50 歳、平均 27.1 歳）、英語についてはサンフランシスコ・ベイエリア在住あるいは神戸大学に留学中の話者（女性 3 名、男性 4 名；殆どが 20 代）を対象とした。実験は、2007 年 3 月から 2008 年 8 月の間に実施された。

刺激として用いたビデオクリップの情報を表 1 にリストする。またクリップの静止画を図 1 に例示する。クリップは 2～7 秒のもので計 30 個が用意された。うち 26 クリップは人あるいは物による自律移動あるいは使役移動を撮影したもの、4 クリップは非移動事象を撮影したダミーであった。更に、練習用として 2 つのクリップが作成された。

表中の「様態の特殊性」のスコアは、本実験とは独立して行った各クリップの聴覚情報および視覚的様態（視覚的に捉えることのできる様態、即ち一般に「様態」と呼ばれるものに当たると思われる）の特殊性評定の平均値を 0 から 1 に換算したものである。この評定は、9 名の日本語母語話者に「各クリップにおける音／移動の仕方がどれくらい特徴的か」を 1（全く特徴的でない）から 3（非常に特徴的）の三段階で判断してもらう形で行われた。P1 およびダミーの 4 クリップについては、移動事象が含まれていないため、視覚的様態（移動の仕方）の特殊性判断は行われなかった。

刺激の提示は、3 パタンのランダムオーダーのうちのいずれかにより行われた。実際の指示文（コンピュータ画面に表示）は以下の通りである。

(3) a. 日本語話者用：

これから 30 の短いビデオを見せます。それぞれビデオの中で何が起きているか、見たこと、聞いたことに基づいて 1～2 文で説明してください。各ビデオの後に 15 秒間の合間を置きますので、その間に声に出して答えてください。

b. 英語話者用：

In this experiment, you will see 30 short video clips on this screen. Within a 15-second interval after each clip, please describe its content in one or two sentences based on what you saw and what you heard.

全ての情報は、ラップトップ・コンピュータ（Apple MacBook）あるいはデスクトップ・コンピュータ（IBM ThinkVision）上で動画再生ソフトウェア Apple QuickTime Player (ver. 7.1-7.5) によって提示された。また、聴覚情報はヘッドフォンを通して与えられた。

表 1. 刺激ビデオクリップ

#	事象	様態の特殊性	
		聴覚	視覚
練習			
P1	男性が卓球のラケットで球をバウンドさせている。	.60	n/a
P2	5名の男性が続いて部屋に入ってくる。	.00	.65
自律移動			
S1	石が池に落ちる。	.45	.15
S2	小さなボールがレンガの道を転がる。	.00	.05
S3	男性が砂利の上を足を引き摺って歩く。	.60	1.00
S4	鍵を右手に持った男性が歩いて横切る。	.40	.00
S5	女性が斜面をスキップする。	.05	.60
S6	男性が歩いて横切る。	.05	.00
S7	男性がカメラに向かって歩いてくる。	.10	.10
S8	男性が低い塀の上から飛び降りる。	.30	.50
S9	3名の男性が続いて部屋を出ていく。	.20	.35
S10	男性が階段を足音を立てて上ってくる。	.65	.05
S11	3名の男性が次々に慌てて部屋に入ってくる。	.60	.70
S12	小さなボールが金属製の階段を弾みながら落ちていく。	.65	.50
S13	笛付き風船が鳴りながら部屋を飛び回る。	.90	.90
S14	バスケットボールが鉄板の上に落ちる。	.85	.20
S15	1枚の葉が木から落ちる。	.05	.05
S16	右手に鍵を持った男性がカメラに向かって歩いてくる。	.35	.00
S17	ハイヒールを履いた女性が階段を下りていく。	.35	.15
使役移動			
C1	男性が部屋の中で紙飛行機を飛ばす。	.05	.30
C2	女性がバスケットボールを坂の上から転がす。	.20	.45
C3	男性が壁に向かって卓球の球を打つ。	.85	.55
C4	男性が硬貨を瓶の中に入れる。	.55	.05
C5	女性が階段の上から空き缶を落とす。	.85	.65
C6	男性がノートを机に叩き付ける。	.80	.55
C7	男性が鍵を床に放る。	.70	.45
C8	男性がでこぼこ道で荷車を押していく。	.70	.15
C9	男性が寝袋を引き摺りながら階段を下りてくる。	.20	.60
ダミー			
D1	女性が傘を開いて肩に掛ける。	.10	n/a
D2	男性が部屋で本をめくっている。	.00	n/a
D3	男性がロッカーを閉める。	.50	n/a
D4	女性が電話のダイヤルを回し応答を待っている。	.30	n/a

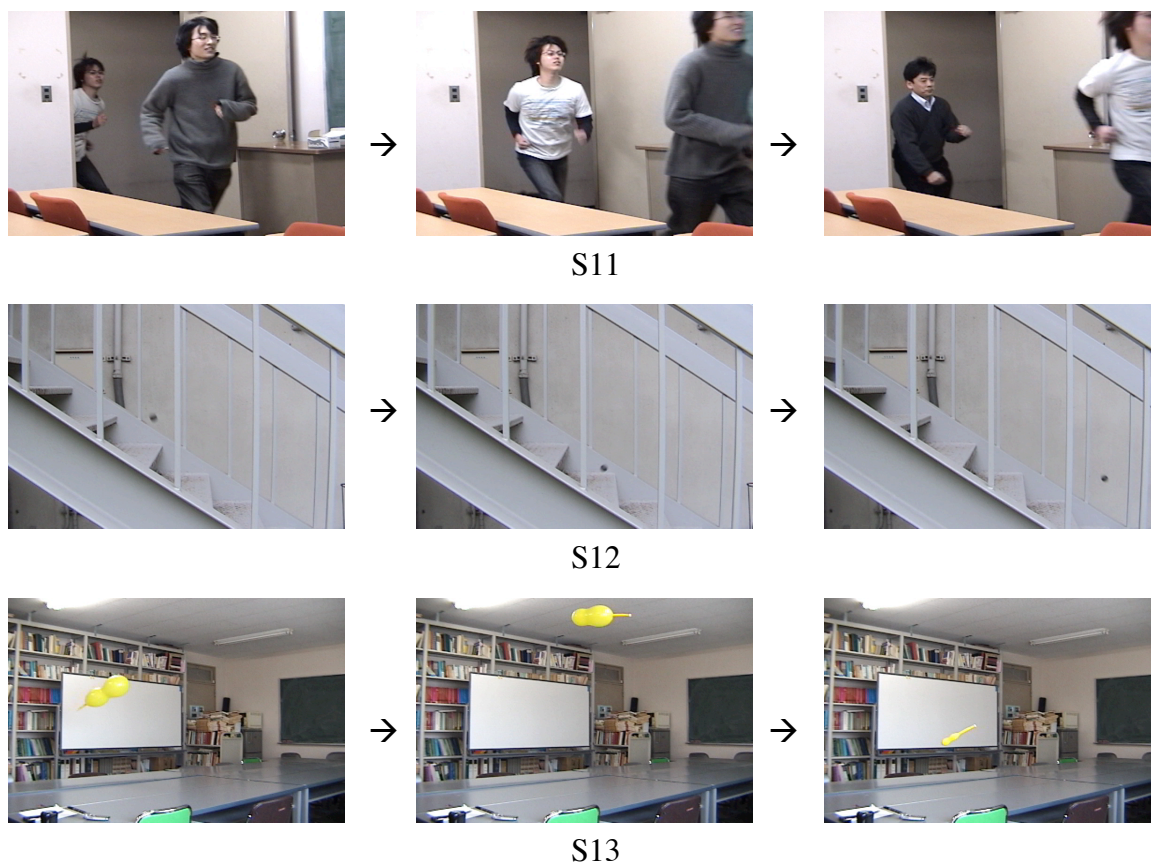


図 1. 刺激ビデオクリップ例

3.2. 予測

本実験の結果に関する予測としては、空間移動表現の類型および音象徴語に関する先行研究より、一部に相反する方向性を持つ 2 パターンが存在しうる。まずは、(4)に挙げる「語りのコスト説」と呼ぶものである。これは、Slobin の元々の様態卓越性仮説が予測する結果である。

(4) 語りのコスト説：

a. 日本語：

音象徴語は主として付加詞として実現するため、語りのコストを抑えるために省略され易い。

b. 英語：

聴覚的・視覚的移動様態は基本的に主動詞で表されるため、頻繁に言及される。

即ち、聴覚的・視覚的様態を表す生産的な語類が、日本語では「ボールががんと鉄板

の上に落ちた」のように、基本的に付加詞という節の付属要素として実現するが、英語では *A ball clanged onto a plate on the ground* のように、節の必須要素である主動詞として実現する (Shibatani 1990: 155; Hamano 1998: 12; Akita, to appear)。15 秒間という時間制限の中で自発的発話を行わなければならないという実験環境ゆえ、語りのコストを低く抑えようとする力が強く働くとなると、日本語では様態表現が頻繁に省略されるが、英語ではそれが難しいため様態が尚も頻繁に表現されることになる。

もう一方の予測は、(5)に示す「語彙的レパートリー説」である。これは、第 2 節で紹介した翻訳研究の主張に沿うものである。

(5) 語彙的レパートリー説：

a. 日本語：

音象徴語が豊富に存在するため、聴覚的・視覚的移動様態が頻繁に表現される。

b. 英語：

音放出動詞および移動様態動詞 (*manner-of-motion verbs*) が豊富に存在するため、聴覚的・視覚的移動様態が頻繁に表現される。

即ち、日英両言語とも、聴覚的・視覚的様態を表すための語を豊富に有するため、それらを用いて様態を頻繁に表現するという予測である。即ち、語りのコスト説と語彙的レパートリー説は、日本語の結果について(4a)と(5a)というほぼ正反対の予測をすることになる。

当該語類の豊富さの指標とするため、日本語については Kakehi et al. (1996)の音象徴語辞典より擬音語根² (例：「ぽきぽき」や「ぽきっ」における「ぽき」) および視覚的移動様態の表現として使用可能な擬態語の語根 (例：「ぶらぶら」や「ぶらり」における「ぶら」) を収集・カウント、英語については Levin (1993)のリストする音放出動詞 (p. 235 ; 例 : *beep, rattle, splash*) と移動様態動詞 (*roll verbs* および *run verbs* ; 例 : *ramble, rush, scamper* ; pp. 264-266) をカウントした。表 2 に示すように、日本語の擬音語根の異なり頻度 (*type frequency*) がとりわけ高く、実際、カイ二乗検定の結果、有意なグループ間差異が確認された ($\chi^2(1) = 33.02, p < .001$)。この事実は、(5a)の日本語に関する予測における「聴覚的様態の頻繁な描写」を強調するものと言える。

表 2. 日英語における移動様態を表す形態素の豊富さ

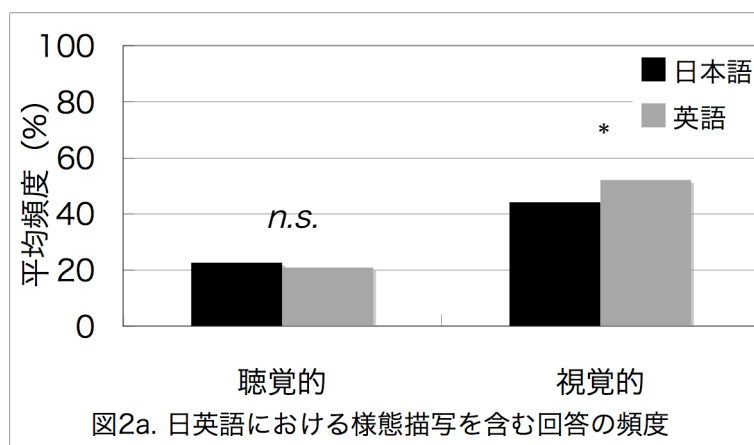
	データベース	聴覚的	視覚的
日本語	Kakehi et al. (1996)	264 (擬音語根)	124 (移動様態擬態語根)
英語	Levin (1993)	118 (音放出動詞)	142 (移動様態動詞)

また、三つ目の予測として、語りのコスト説と語彙的レパートリー説がそれぞれ部分的に支持されるということも考えられる。いずれにせよ、ここで注意すべきは、これらの仮説は、必ずしも Talmy の枠付け類型論（即ち移動経路表現の類型論）から直接的に導き出されるものではないという点である。関連する議論として、松本(2003a: 62-67)および Matsumoto (2003b: 408-413)は、音象徴語のような様態を表す特別な語類の存在は S 言語・V 言語の対立とは必ずしも相関しないことを述べ (cf. Wienold 1995)、「様態範疇化パラメーター (the manner categorization parameter)」という独立したパラメーターが存在する可能性に言及している。例えば、フランス語は V 言語とされるが、日本語・韓国語の音象徴語のように豊かな様態用の語類を持たない。（これに関連して、Beavers, Levin, and Tham 2008 は Talmy の類型論の細分化を主張している。）同様に、様態への言及頻度（あるいは様態表現の頻度）という言語使用レベルにおける様態表現の考察である本研究は、移動経路の類型とは別個の類型が様態表現に必要であることを示唆することになる。

3.3. 結果と考察

3.3.1. 全体像^{3, 4}

本実験の結果は、全体として(5)の語彙的レパートリー説を支持する形となった。まず、一対の標本による t 検定により有意な日英差が得られたのは、視覚的様態表現を少なくとも一つ含む回答の頻度についてのみであった。換言すれば、視覚的様態を描写した被験者数の平均は英語の方が多かったということになる ($t(25) = -2.12, p < .05$)。この点については、(4)の語りのコスト説を支持する結果と解釈できる。ところが、図 2a に示すように、こうした違いは聴覚的様態表現を少なくとも一つ含む回答については見られなかった ($t(25) = .58, p = .57$)。日本語話者も英語話者並みに聴覚的様態に言及したというこの結果は、語彙的レパートリー説を支持するものである。



注：以降、日英語のデータは百分率により比較する。これは、両言語で被験者数が違ったためである。

* $p < .05$, *** $p < .001$

実際に得られた各種移動様態表現を(6-7)に例示する(より完全なリストについては附録を参照)。

(6) 日本語：

a. 聴覚的様態表現：

男の人が階段をだんだんだんだんという音を立てながら上ってきました。
(擬音語；S10)

水色の人がうるさく歩いた。(擬音語以外の音表現；S3)

b. 視覚的様態表現：

坂道をボールがころころと転がっていった。(擬態語／移動様態動詞；S2)
女の人が階段を早足で下りています。(擬態語・動詞以外の視覚的様態表現；S17)

(7) 英語：

a. 聴覚的様態表現：

A guy stomped up the stairs. (擬音語；S10)

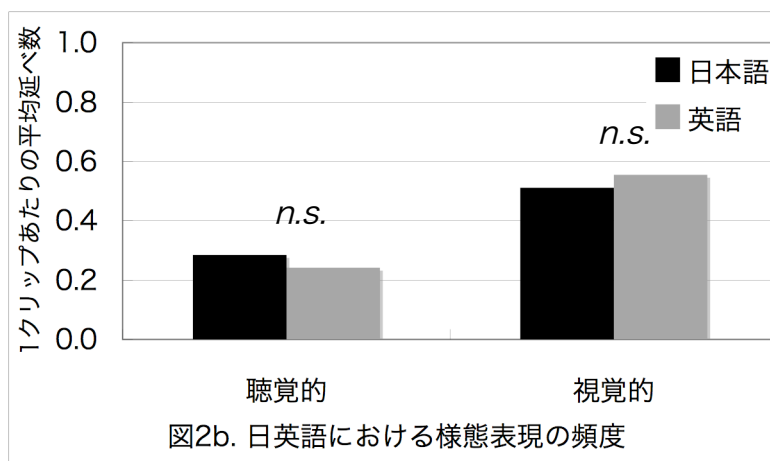
Someone noisily walked across the gravel. (擬音語以外の音表現；S3)

b. 視覚的様態表現：

A ball rolled across the ground. (移動様態動詞；S2)

A woman walks quickly down the flight of stairs in heeled boots. (移動様態動詞／その他の視覚的様態表現；S17)

続いて、各様態表現自体の数を比べると、聴覚的・視覚的様態表現いずれについても有意な言語間差異が見られなかった（聴覚的様態表現： $t(25) = -.07, p = .94$ ；視覚的様態表現： $t(25) = -.88, p = .39$ ）。即ち、語彙的レパートリー説が支持されたことになる。



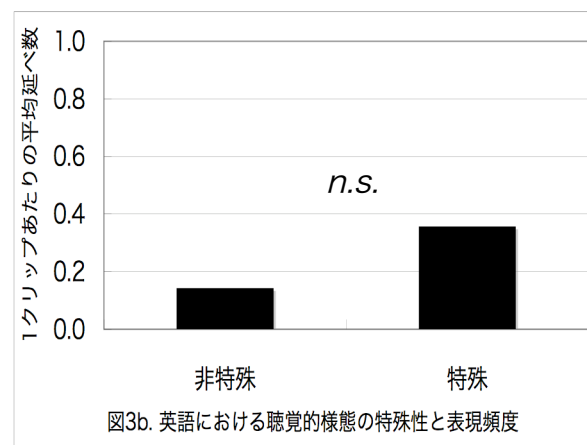
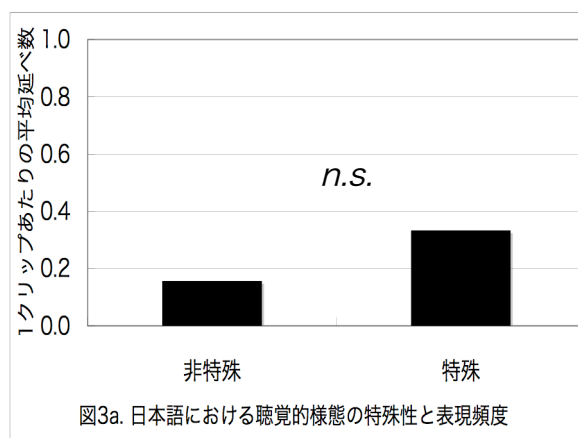
3.3.2. 移動様態の特殊性

様態描写頻度において V 言語の日本語と S 言語の英語の間に大差がなかったという上の結果は、使用した刺激ビデオクリップの特殊な性質が原因となった可能性が考えられうる。Oh (2003)は、V 言語であるスペイン語の話者が様態付加詞を助けに ((1b) 参照) 頻繁に様態を表現したという Naigles et al. (1998)の報告に対して、彼らの使用したビデオクリップにおける移動様態の特殊性・非日常性が原因となった可能性があることを指摘している。即ち、Naigles らの選んだ移動様態は、四つん這い、足を滑らせての歩行、回転しながらの移動といった、日常的とは考えにくい有標なものであったため、英語話者のみならずスペイン語話者もそれに注目し言語化したというのである。Oh はこの反証のために、歩行・走行という日常的な移動様態のクリップを用いた実験を行い、V 言語である韓国語の話者はやはり様態表現をあまり使わなかったことを報告している⁵。

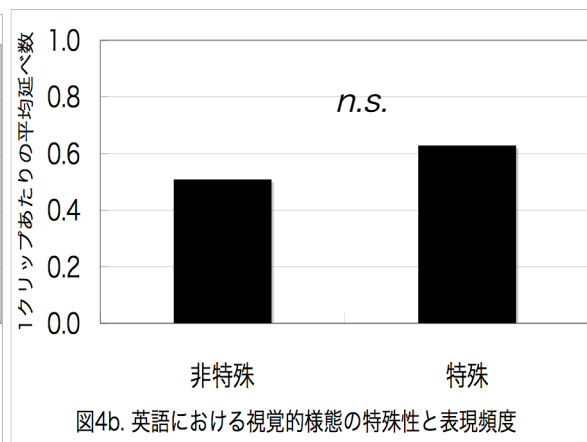
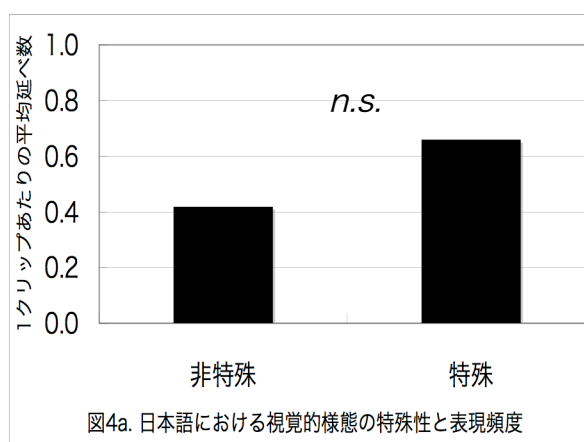
では、同様の反駁はここでの我々の結果も退けうるであろうか。この問題を解決す

るために、本データを聴覚的・視覚的様態の特殊なクリップ（表 1 の特殊性スコアが 0.5 以上のもの）への発話とそうでないクリップ（表 1 の特殊性スコアが 0.5 未満のもの）への発話に分けて検証し直した。

その結果、両言語において上と同様の結論が得られた。図 3ab に示すように、等分散を仮定した 2 標本による t 検定の結果、まず聴覚的様態表現の頻度に関して、非特殊聴覚的様態クリップと特殊聴覚的様態クリップの回答の間には、日本語でも ($t(24) = -1.91, p = .07$) 英語でも ($t(24) = -1.96, p = .06$) 明確な差は得られなかった。しかし、両言語ともに有意傾向が見られたことは事実であり、今後人数を増やすことで、Oh 式の反駁が達成される可能性がある。



次に、図 4ab に示すように、視覚的様態表現の頻度に関しても、非特殊視覚的様態クリップと特殊視覚的様態クリップへの回答の間には、日本語でも ($t(24) = -1.21, p = .24$) 英語でも ($t(24) = -.65, p = .52$) 有意な差が得られなかった。



即ち、使用した移動様態の特殊性に関わらず、両言語話者による様態表現の頻度は

同程度だったと言える。この結果は、前小節で至った語彙的レパートリー説への支持に信頼性を与えるものである。また、今回の調査では、聴覚的特殊性と聴覚的様態表現の頻度の間にも（日本語： $r = .20$, $N = 26$, $p = .32$ ；英語： $r = .12$, $N = 26$, $p = .56$ ）、視覚的特殊性と視覚的様態表現の頻度の間にも（日本語： $r = .19$, $N = 26$, $p = .36$ ；英語： $r = -.01$, $N = 26$, $p = .96$ ）、有意な相関が得られなかった。即ち、相関分析においても、様態が特殊であるほど表現され易いというわけではないことが窺われる。このことから、「日常的な様態ならば V 言語話者は言及しない」とする Oh (2003) の議論は、本論からは支持されないことになる。よって、本実験結果は全体として、言語使用の観点からも様態表現には枠付け類型論とは別個の類型が想定されうることを示唆するものである。

3.3.3. 経路表現

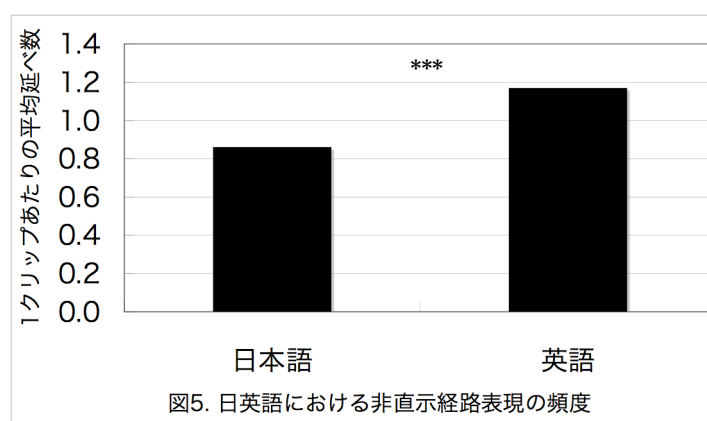
先に述べたように、様態表現の頻度に関しては枠付け類型論から独立した類型論が必要である可能性がある。ここでは、経路表現の頻度に関しては、先行研究の指摘通り枠付け類型論に沿う結果が得られたことを確認しておく。

Slobin (1997, 2004, etc.) は、移動の基準となる要素 (Ground) への言及という観点から、経路表現の数の通言語比較を行っている。彼によれば、S 言語では、経路が節の非主要部（とりわけ不変化詞等の「軽い」要素）で表されるため、一つの節の中でそれらを複数連ねて連続的経路を表すことができる。一方、V 言語では、経路が節主要部で表されるため、新たな経路部分を導入するのに別個の節を用いることになり、語りのコストが余計に必要となる。その結果、本実験で得られた以下の例のように、日本語話者より英語話者の方が（非直示）経路要素を多く産出することとなる。

(8) クリップ C3 :

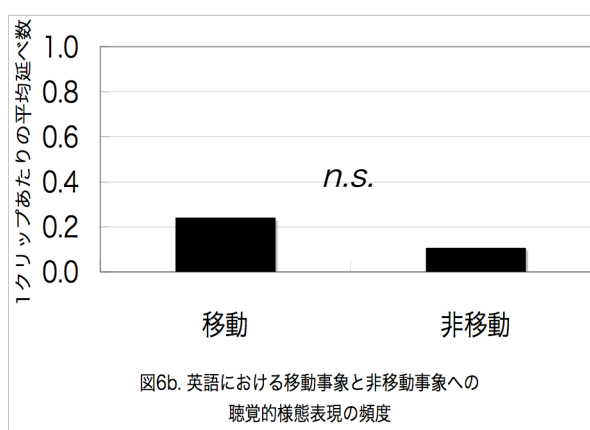
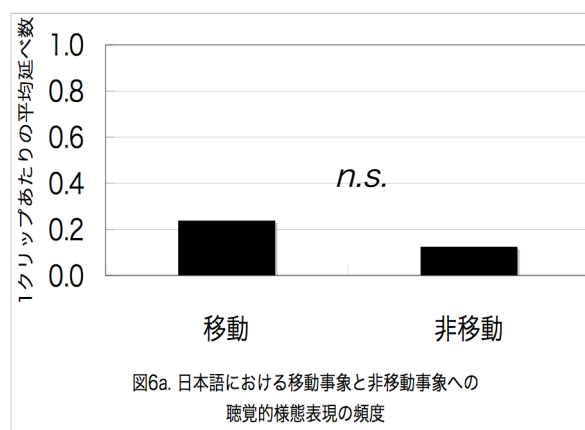
- a. 卓球のラケットでピンポン球を壁に当てましたが、ぱたっと落ちてボールが返ってくることはなかった。
- b. The man hit the pingpong with [a] pingpong paddle at the wall and it bounced off the wall back toward outside of the camera.

図 5 は、本実験より得られた非直示経路表現の頻度を示す。Slobin の議論の通り、V 言語である日本語よりも S 言語である英語の方が経路要素を多く使用したという結果である ($t(25) = -4.20$, $p < .001$)。



3.3.2 節の分析と合わせると、以下のような結論が得られよう。つまり、経路表現の使用は経路の言語化を扱う枠付け類型論と連動しているが、様態表現の使用については必ずしも同じ類型論の範囲内ではない、というものである。

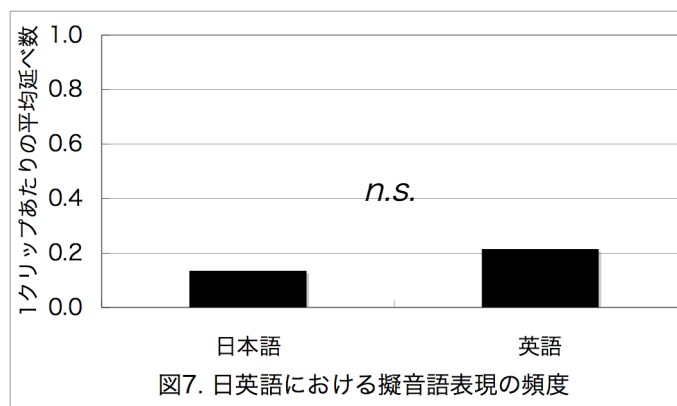
本実験からは、この考えを更にサポートするデータが得られた。即ち、非移動事象を撮影した四つのダミークリップへの回答と比較した結果、図 6ab に示すように、聴覚的様態表現の平均頻度は移動事象を含む 26 クリップの場合と変わらなかったのである（日本語： $t(28) = .90, p = .38$ ；英語： $t(28) = .89, p = .38$ ）⁶。つまり、少なくとも音という付随情報への言及頻度は、移動事象に固有の特徴として決まっているわけではなさそうである。



3.3.4. 聴覚的様態表現の表現力

最後に、本実験で得られた様態表現を更に詳しく見ることで、日英語話者の発した様態表現の質的な違いを観察する。

まず、擬音語表現（擬音語および音放出動詞・名詞）の頻度に関しては、日英語間で有意な違いはなかった（ $t(25) = -1.57, p = .13$ ）⁷。



ところが、実際に使われた擬音語を見てみると、英語話者より日本語話者の方が非慣習的あるいは高度に類像的な擬音語を用いることで強力な表現力 (expressiveness) を実現していることが観察された。例えば、(9)の例では、笛付き風船から空気が抜ける際に発生する音を、日本語話者は「ピーーーーーっ (て)」という非典型的な擬音語である長母音を用いた強調形を使用しているのに対し (秋田 2008 参照)、英語話者はいずれも *whistle* のような慣習的な動詞形を用いている。

(9) クリップ S13 (図 1 参照) :

a. 日本語 :

なんかゴム風船がピーーーーーって...なんでしょう...飛び回ってます。

b. 英語 :

A balloon whistled across the room as the air blew out of it.

得られた擬音語を全てリストすると、こうした表現力のコントラストが更にはっきりする (括弧内の数字は 2 回以上出現した場合の出現回数を示す)。

(10) 日英語話者より得られた擬音語 :

a. 日本語 :

がたがたがたがた (と)、かちゃかちゃ、がんがん (と)、がらがら (と) / がらんがらんがらん (と) (2)、ざーざーざー (と)、さらさらさら (と)、じゃりじゃり / じゃらじゃらじゃらじゃら (砂利の音) (3)、だん (と)、だんだんだんだん (と)、ちゃらちゃら / ちゃりちゃり (6)、ちゃり (一) ん (と) / ちゃりっ (と) (5)、とん (と)、とんとんとんとん (と)、ばん (と)、ぱたっ (と) (2)、ぱたぱたーっ (と)、ぴゅーっ (と) / ピー

ー——っ (て) (3)、ぽちゃん (と)、ぽと

b. 英語:

clang, clatter, click, clink, clip-clap, clump, crash, crunch, jiggle (2), jingle (2), plop, plump, rattle, ruffle, rustle, scream (2), screech, slam (3), slap (4), slash, smack (2), splash, squeak/squeen, stomp (5), whistle (2)

こうした表現力における日英差は、日本語の擬音語副詞・間投詞が極めて開いた類をなす一方で (Imai et al. 2008 参照)、英語の擬音語動詞・名詞がそれよりは遥かに閉じた類をなすことに起因すると考えられる⁸。そして、この開いた類という特性は、本実験において日本語話者に頻繁な音描写を可能にした一因と考えることができる。

4. 結論

本稿は、音を含むビデオクリップを用いた映像説明実験に基づき、日英語話者による移動様態表現の比較を行った。その結果、量的には、全体として日本語話者は音象徴語等を用いることによって、英語話者並みに聴覚的および視覚的様態表現を使用していることが分かった。また、質的には、日本語話者は非慣習的な音象徴語形を用いることによって、英語話者よりも高い表現力でもって (とりわけ聴覚的) 移動様態を描いていた。音象徴語という語彙的レパートリーとその極めて開いた類であるという特性が、日本語話者による頻繁かつ鮮やかな様態描写を可能にしたという今回の結果は、様態表現が言語使用レベルにおいて Talmy の枠付け類型論の外側で議論されるべきことを示唆するものである。枠付け類型論が移動の経路の言語化を扱うものであることを考慮すると、この結論は理に適ったものと言えよう。

残された課題としては、主として以下の三点が考えられる。一つ目に、もし今回用いたビデオクリップの殆どが特殊な様態を含んでいて、表 1 の特殊性評価はそれらの中の相対評価であったとしたら、「特殊でない様態ならば V 言語話者は言及しない」という Oh (2003) の結論は、日本語についてもまだ棄却されていないことになる。二つ目に、我々のビデオは、クリップ S4 やクリップ S6 のように、閉じた空間へ／からの移動等に見られるような境界越え (boundary-crossing) が含まれていないものが多かった。そのせいで、日本語でも経路動詞ではなく「歩く」のような様態動詞が頻繁に使用されたという可能性がある。最後に、今回の指示文には誘導要因が認められるかもしれない。即ち、「見たこと、聞いたことに基づいて (based on what you saw and what you heard)」クリップ内容を説明するように求められたことで、両言語の話者が特別に聴覚的・視覚的様態に注目し頻繁に言及したという可能性は十分にありうることである。よって、本プロジェクトは今後、指示文によるバイアスを排除した上

で、境界越えを含む日常的移動事象（歩行・走行）を刺激クリップに盛り込んでいく必要がある。

とはいえ、同じ刺激への反応として、英語話者よりも日本語話者の方が鮮明な様態描写を行ったという今回の結果は、音象徴語研究という文脈で見ても有意義な発見であり、今後移動の類型論におけるこの語類の役割が追究されていくことが望まれる。

謝辞

本研究は、秋田への科学研究補助金（特別研究員奨励費；課題番号 19-536「日本語音象徴語の統語と意味に関する理論的研究」）の助成を受けている。本論文の過去のヴァージョンは、2008年10月に神戸大学で開催された Kobe Conference on Language Typology: English, Japanese, and Other Languages において発表された。その際に、貴重なコメントを下された方々に御礼申し上げる。また、今井むつみ・Asifa Majid の両氏にも手法・分析の両面より有用なご指摘を頂いた。更に、Russell Lee-Goldman 氏には、被験者とのコンタクト等においてご協力を賜った。最後に、岸本秀樹先生には、本稿の体裁面において詳細なアドバイスを頂いた。ここに記して謝辞としたい。本稿における誤りは全て筆者自身のものである。

注

- ¹ 絵本説明課題においても、これに似た結果が得られている。Slobin は、*Frog, Where Are You?* (M. Mayer 1969) という文字のない絵本における鼻が木の穴から飛び出てくる場面の描写を、諸言語で比較している。その結果、S 言語では移動様態動詞の使用がある程度見られたが、V 言語では殆ど見られず、代わりに移動経路動詞が用いられたという。Slobin (2000: 113) では、使用された移動動詞のうち様態動詞の占めた割合は、S 言語ではオランダ語 17%、ドイツ語 18%、英語 32%、ロシア語 100%であったのに対し、V 言語ではスペイン語 0%、フランス語 0%、トルコ語 0%、ヘブライ語 3%であったと報告している。これに対し、松本の調査では、日本語話者における様態動詞の使用は 21%（但しいずれも「飛び出す」と S 言語並みであった）。
- ² ここで全ての擬音語根をカウントしたのは、擬音語は基本的に移動事象に伴う音の描写として使用可能なためである。例えば、移動様態とは考えにくい「ぽきぽき」のような音であっても、「落ちている木の枝の上をぽきぽきと歩いていった」というように移動に伴う音として表現可能である。逆に、移動表現に使われうる殆どの擬音語が他の事象にも使用可能であることは、移動の音が移動様態の一種として注目されてこなかったことと関連しているかもしれない。
- ³ 繰り返しのない二元配置（被験者×表現の種類）の分散分析の結果、日本語に関しては殆ど、英語に関しては全く個人差が得られなかった。具体的には、日本語における様態表現の全体の頻度については、個人差が認められた ($F(9, 40) = 2.31, p < .05$)。ところが、日本語における音象徴語の頻度 ($F(9, 10) = 2.00, p = .16$) や英語における様態表現の全体の頻度 ($F(6, 28) = 1.05, p = .42$) については有意な個人差は確認されなかった。
- ⁴ 本実験においては、自律移動クリップと使役移動クリップについて平行な結果が得られたため、以降両者を合わせての分析を示していくことにする。また、以降延べ頻度に基づき議論を進めるが、異なり頻度についても同様の結果が得られた。異なり頻度については附録を参照されたい。

⁵ Slobin (2004: 253)は韓国語について、その直示動詞の必須性が様態動詞の生起を阻み、様態描写頻度が低くなることを述べている。韓国語は日本語同様、音象徴語に富むV言語である。そして、本実験では、日本語において直示動詞「(て) いく」「(て) くる」の使用が英語よりも遥かに頻繁であった ($t(25) = 6.29, p < .001$)。このことを考慮すると、日本語でも韓国語のように様態描写頻度が抑えられてもよさそうなものであるが、我々の実験ではそのような結果は得られなかった。この点は、今後更に考察が必要である。

⁶ ダミークリップには移動が含まれていないため、(多くの場合移動に限って用いられる) 視覚的移動様態表現については、同様の比較できなかった。

⁷ 本調査では、英語の音放出動詞を一律に擬音語的 (onomatopoeic, phonomimic) と想定し集計を行った。しかし、岩田彩志氏のご指摘通り、英語の音象徴語が音韻形態論的に定義できない以上 (秋田 2008)、この想定には再考の余地がある。

⁸ 同じ擬音語でも、間投詞や効果音的に用いられる場合には、Rreeowrl! *A cat cried outside the house* のように英語でも開いた類としての特性を示しうる (Akita, to appear 参照)。また、ここでの「開いた／閉じた」という評価は、形態的非慣習性のみを尺度としているため、Peter Sells 氏のご指摘の通り、その程度についてはより精密な議論が求められる。

附録：本実験で得られた移動様態表現

A. 日本語：

(i) 擬音語以外の聴覚的様態表現：

音を立てながら、物凄く大きい音がしました、わざわざ音を立てて、etc.

(ii) 視覚的様態を表す擬態語 (5 種)：

ぐるぐる、ころころ、だだだだー (と)、ぴょん (と)、ぽいつ (と)

(iii) 視覚的移動様態動詞 (複合動詞を含む) (11 種)：

歩く (51)、駆ける (10)、転がる／転げる (14)、ジャンプする、スキップする (9)、散る、飛ぶ／跳ぶ (14)、弾む、跳ねる、舞う

(iv) 日本語におけるその他の視覚的様態表現：

足を引き摺りながら、慌てて、両足揃えて、楽しそうに、etc.

B. 英語：

(v) 擬音語以外の聴覚的様態表現：

it is very noisy, a noisy sidewalk, (roll) silently, (walk) loudly

(vi) 視覚的様態動詞 (句) (13 種) :

bounce (10), *fly* (2), *drag his feet/sneakers* (3), *hop*, *jump* (6), *roll* (11), *run* (9), *rush*, *saunter*,
shuffle (his feet) (4), *skip* (7), *tremble*, *walk* (40)

(vii) その他の視覚的様態表現 :

draggily, *quickly*

参考文献

- 秋田喜美. 2008. 「音象徴語の『範疇化問題』への一つの答え: 田守・スコウラップ(1999)へのリプライ」 『日本認知言語学会論文集』 8: 428-438.
- Akita, Kimi. To appear. Gradient integration of sound symbolism in language: Toward a crosslinguistic generalization. In Shoichi Iwasaki, ed., *Japanese/Korean Linguistics* 17. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Allen, Shanley, Aslı Özyürek, Sotaro Kita, Amanda Brown, Reyhan Furman, Tomoko Ishizuka, and Mihoko Fujii. 2007. Language-specific and universal influences in children's syntactic packaging of Manner and Path: A comparison of English, Japanese, and Turkish. *Cognition* 102, 1: 16-48.
- Beavers, John, Beth Levin, and Shiao Wei Tham. 2008. The typology of motion expressions revisited. Ms. (available at <http://www.stanford.edu/~bclevin/motion-typology-working.pdf>)
- Gennari, Silvia P., and Steven A. Sloman, Barbara C. Malt, and W. Tecumseh Fitch. 2002. Motion events in language and cognition. *Cognition* 83: 49-79.
- Hamano, Shoko. 1998. *The Sound-Symbolic System of Japanese*. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Imai, Mutsumi, Sotaro Kita, Miho Nagumo, and Hiroyuki Okada. 2008. Sound symbolism facilitates early verb learning. *Cognition* 109, 1: 54-65.
- Kageyama, Taro. 2007. Explorations in the conceptual semantics of mimetic verbs. In Bjarke Frellesvig, Masayoshi Shibatani, and John Smith, eds., *Current Issues in the History and Structures of Japanese*, 27-82. Tokyo: Kurosio Publishers.
- Kita, Sotaro. 1997. Two-dimensional semantic analysis of Japanese mimetics. *Linguistics* 35, 2: 379-415.
- 松本 曜. 2003a. 「タルミーによる移動表現の類型論をめぐる問題: 移動の意味論I」 『明治学院論叢』 695: 51-82.
- Matsumoto, Yo. 2003b. Typologies of lexicalization patterns and event integration: Clarifications and reformulations. In Shuji Chiba et al. eds., *Empirical and Theoretical Investigations into Language: A Festschrift for Masaru Kajita*, 403-417. Tokyo: Kaitakusha.
- Naigles, Letitia R., Ann R. Eisenberg, Edward T. Kako, Melissa Highter, and Nancy McGraw. 1998. Speaking of motion: Verb use in English and Spanish. *Language and Cognitive Processes* 13, 5: 521-549.
- Oh, Kyung-ju. 2003. *Language, Cognition, and Development: Motion Events in English and Korean*. PhD dissertation, University of California at Berkeley.
- Ohara, Kyoko Hirose. 2002. Linguistic encodings of motion events in Japanese and English: A preliminary look. *The Hiyoshi Review of English Studies* 41: 122-153. Keio University.
- Shibatani, Masayoshi. 1990. *The Languages of Japan*. Cambridge/New York: Cambridge University Press.
- Slobin, Dan I. 1996. Two ways to travel: Verbs of motion in English and Spanish. In Masayoshi Shibatani and Sandra A. Thompson, eds., *Grammatical Constructions: Their Form and Meaning*, 195-219. Oxford: Clarendon Press.

- Slobin, Dan I. 1997. Mind, code, and text. In Joan Bybee, John Haiman, and Sandra A. Thompson, eds., *Essays on Language Function and Language Type: Dedicated to T. Givón*, 437-467. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Slobin, Dan I. 2000. Verbalized events: A dynamic approach to linguistic relativity and determinism. In Susanne Niemeier and René Dirven, eds., *Evidence for Linguistic Relativity*, 107-138. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Slobin, Dan I. 2004. The many ways to search for a frog: Linguistic typology and the expression of motion events. In Sven Strömquist and Ludo Verhoeven, eds., *Relating Events in Narrative: Typological and Contextual Perspectives*, 219-257. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Slobin, Dan I. 2005. Linguistic representations of motion events: What is signifier and what is signified? In Constantino Maeder, Olga Fischer, and William J. Herlofsky, eds., *Outside-In – Inside Out*, 307-322. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Sohn, Ho-Min. 1994. *Korean*. London/New York: Routledge.
- Sugiyama, Yukiko. 2005. Not all verb-framed languages are created equal: The case of Japanese. *Proceedings of the Thirty-First Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 299-310.
- Talmy, Leonard. 1985. Lexicalization patterns: Semantic structure in lexical forms. In Timothy Shopen, ed., *Language Typology and Syntactic Description, Vol. 3: Grammatical Categories and the Lexicon*, 57-149. Cambridge: Cambridge University Press.
- Talmy, Leonard. 1991. Path to realization. *Proceedings of the Seventeenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 480-519.
- Talmy, Leonard. 2000. *Toward a Cognitive Semantics, Volume II: Typology and Process in Concept Structuring*. Cambridge, MA/London: The MIT Press.
- 田守育啓・ローレンス・スコウラップ. 1999. 『オノマトペ：形態と意味』くろしお出版.
- Wienold, Götz. 1995. Lexical and conceptual structures in expressions for movement and space: With reference to Japanese, Korean, Thai, and Indonesian as compared to English and German. In Urs Egli, Peter E. Pause, Christoph Schwarze, Armin von Stechow, and Götz Wienold, eds., *Lexical Knowledge in the Organisation of Language*, 301-340. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.